

〔翻訳〕 シドニー・ソンニーノ 「地主と農民」

勝 田 由 美

Sidney Sonnino, *Proprietari e contadini*, estratto da
 “*I contadini in Sicilia*” (Firenze, 1877)

KATSUTA Yumi

地主と農民、より一般的には、開化された人々である「貴紳」(galantuomo)と農民との関係には、今なお封建的な慣習が多く残っている。これも、シチリアでは封建制度が今世紀初頭まで繁栄を謳歌していたことを思えば、驚くべきことではない。その法的廃止は1812年のことで、1818年8月2日、3日の2つの法がそれを完遂したのだが、それはシチリア社会の現実をただちに変革しうる革命や運動をともしなうこともひきおこすことも、その後を生じることもなかった。そのときまでは法の下で権能であった事柄は、事実上の権力や横暴として残存し、法では市民と宣言された農民は、抑圧された奴隷のままにとどまった。大土地所有者が封建領主(barone)であり続けたのは呼称だけではなく、一般には心情的にも、農民にむかう地主の立場は家臣に対する領主のそれと同じであった。そこには新興市民層もいるが、数もそれほど多くはなく、利得をむさぼることに汲々として、くだらぬ見栄や権力への渴望においてのみ、貴族の模倣者となっている。

地主は、そこでは今でも真の権威とみなされている。シチリアの地主は、負債や災難で極限まで追いつめられても、土地を売ることをひどく嫌う。土地の一部を手放すことは、まさに身分を剥奪される(*capitis diminuito*)ほどの、自身や一族の威厳を傷つける行いとみえるのだ。しかしながら、土地所有という事実に伴随するこの威厳の観念が、職務や義務の観念に行き着くことはなかった。

一般に、階層間には連帯の感情がまったくなく、というよりも、それはシチリア人以外の者との対立においてのみ表れる。それ以外の場合には、地主は新興市民や日雇い農民を利得の手段、収奪すべき土地としてしか考えないし、彼らの方でも、富者とは抑圧者、あるいは抑圧を強化して、乏しい稼ぎを掠めとるために全生活を監視する何者かとしてしか見ようとはしない。

シチリア社会を木喰い虫のようにむしばんでいるのは、高利の前借りである。シチリアの農民は、控えめでよく働き、労苦によく耐える。土壌は他に類のないほど肥沃であり、小麦は播種量の8倍を収穫できる。これは深く耕し施肥をするトスカーナのそれよりも多いが、シチリアでは、鍬でやっと掌尺(25cm)程度の溝を掘るだけで、施肥もあまり行わない。シチリアでは気候も穏やかで安定しているからだ。だがこうしたすべてにかかわらず、農民達は貧しい。農業契約は、農民達の競争で、年間総収入を生活の最低限度にまで引き下げてしまう程にしかない。どのような時代や場所においても、法や協定、というよりも慣習が、労働者間の自由競争を制限したことはなかっただろう。が、シチリアではさらに悪いことに、島の大半の地域では特有の契約形態や農業の状況によって、農民は豊作の年でも必ず金を借り、援助を求めなければならない。まして凶作の年やその直後に不作が続くような年のことを想像されよ！ 資本が労働にもっとも苛酷な状況をしいるのはこのときである。

高利の前借りは、シチリア農民にあらゆる貯蓄や生活の改善を不可能にする。そしてそれ以上に、彼らを常に精神的抑圧と合法的隷属の状態にとどめることで、彼らのあらゆる自由と自尊心を奪う。シチリアの農民は、地主や外部の者に対してほぼ恒常的に借金を負っている。労苦の代償は、農民が幸運のすべてを完全に放棄してうやうやしく請い求めるべき援助として与えられるが、そうでなければ、彼はより多く働くほど収穫時にはより有利になるであろう。その一方には、合法あるいは非合法に数百リラの積立金を徴収し、少しも労働せずに、農民への容赦ない高利の貸し付けにより怠惰と悪徳のうちに生活する者たちがいる。社会の有用な成員であるべき人々は、まさにその事実によって共同体に有害な寄生虫と化す。

だからといって、シチリアでは何がしかの資産家すべてが高利貸しで無為に生活しているというのではない。逆に差配(gabellotti)という精力的・活動的な人々の存在を示せば、そうした主張は誤解であり、笑止千万だとわかるだろう。だがそれでも悪習は、シチリア社会の健全さを大いに損なうほど蔓延しているのである。

貴紳と呼ばれる人々は、コムーネ行政の全体に加え、慈善団体の資産管理権をも手中にしている。自治体の行政を、彼らを利し、農民に不利益となるよう利用するやり方は、各コムーネの課税項目を点検すれば見当がつく。多くは農民の所有である荷役用の牛、ラバや馬に対しては、概して高額の税が課されている反面、肉牛や乳牛に対しては、それらが地主の持ち物であるがゆえに、課税はまれで、しかもわずかな額にすぎない。農民はほとんどの市町村で、ラバ一頭あたり8リラ、ロバ一頭あたり5リラにも及ぶ税を払い、地主や差配は、数百頭もの肉牛や乳牛に対して、無課税であるか相対的に少額しか払っていない。1874年には、荷役用の牛馬にコムーネが課す税はシチリア全体で総額589,557リラであるのに対し、肉牛や乳牛に対するそれは146,493リラにすぎない。

コムーネが課す消費税と土地税の額を調べても、同様の現象が見えてくる。シチリアでは、都市人口の大部分、時にはそのほとんど全部が、農民とその家族で構成されているということに注意されたい。1874年にコムーネが課した消費税の総額が10,322,081リラであるのに対

し、土地への課税総額が2,857,110 リラであることは、きわめて意味深長である。

あるいは、こうした事態をさらに際立たせるには、この2つの税額をシチリアとトスカーナの農村部のコムーネだけで比べてみることだ。農村部といっても、トスカーナでは人口が6,000人に満たないような集落にも多くの市民階級が集住しているのに対して、シチリアでは大半が農民である。1874年には、トスカーナの農村コムーネにおける消費税が総額484,235リラ、土地税が5,058,140 リラであったのに対し、シチリアでは、消費税611,294 リラに対して土地税1,097,173リラであった。トスカーナの農村コムーネは人口1,562,294人でその多くは農民ではなく、消費税の大部分は農民の負担ではない。シチリアでは、農村コムーネの住民は779,514人、そのほぼ全員が集落に住む耕作者で、小麦粉1リットルを消費するごとに税を支払っている。シチリアのコムーネには、土地にはまったく課税せず、消費税を重くしているところも少なくない。

そのうえ、島のある重要なコムーネでは、県知事のお墨付きのもとで、コムーネによる製粉税が10年間にわたって徴収されているという！ それも、1860年の統一前にブルボン家が使用していた古い印紙を用いてである。

人頭税の総額から明らかになることはないが、個々のコムーネに目をむければ、階層間での分配がまたも不公平であることがうかがえる。税額の最高値、最低値はコムーネによって大きく異なり、場所によって2～50リラ、または5～80または100リラ、さらに10～80リラというところもあるが、いずれにしても割り当ては不均衡である。2、3の非常に裕福な貴族がせいぜい50リラか100リラ、富裕な市民や地主が20～30リラしか払っていないところで、分益小作人が5～10リラ、日雇い農民でも2～5リラを支払っているらしい。

コムーネの支出については、統計が概略的にすぎて推論はほとんどできないが、今日シチリアを一巡する者は、1860年以来、多くの市立劇場が建てられ、なお数件が建設中であることに驚くだろう。ありとあらゆる市役所に、劇場建設といった贅沢な出費への熱狂の嵐が到来したのだ。いまだに道路もまったく整備されておらず、墓地や嘱託医（medico condotto）も足りず、法律により責を負うべきすべてのことに着手したとすらいえないようなコムーネが、劇場の建設と補修、オペラやバレエの上演のための潤沢な補助金には数千リラも出すというのだ。

そして、農民の都市への集中は、公衆道徳や、自治体条例の厳密な適用を他のどこにおいてよりも困難にしている。ここでも、しばしば見られるように、必要で不可避の進歩が、人民の諸階層に対して埋めあわせようのない多大な害悪を及ぼしている。こうして、島の多くの都市では、街路を歩き回る豚の見苦しい姿をなくそうと、違反者に重い罰金を課すことにした。すると、自らが住むための部屋しかもたず、豚の餌を探し回ることもできない農民は、その飼育をあきらめざるを得ず、多大な犠牲を払って利得の源泉を失ったのだ。また、別の地域では、農民が、豚を売る際に払う消費税の担保として要求される多額の引当金を支払うことができず、豚を手放さざるをえなかった。

このように陰鬱な話ばかりであるが、コムーネ行政からシチリアの私的慈善団体や公的慈善の状況に目を移せば、様相はさらに嘆かわしいものとなる。食糧の山は、管理者が自身のために手広く高利をむさぼる手段と化している。彼らは大量の小麦を借用して6ヶ月かそれ以下の期限で25%の高利とひきかえに、それを貧しい農民に譲る。あるいは、それ以前に元手を消費し尽くしてしまい、すべてがあとかたもなく消えてしまう。

我々の自由な制度はこうした状況を強めるようにできており、選挙や出版なども、現状では、一階級が他を犠牲にして遊び暮らせるように、その手に渡された武器にほかならない。

コムーネと領主の間の混交した権利を分解し、とくに山間部では多くのコムーネが保持していた、牧草や薪のための入会権を徐々に抑圧することは、農民階級をさらに疲弊させる重大要因となっている。ただ働いて、ささやかな税を収める自営農民にとって、こうした権利は構成員の資格と不可分の譲渡し得ないもので、それゆえ、まさに財産そのものでもあり、一時的な危機にみまわれても困窮しないための貴重このうえない繁栄の源であった。こうした貧しい人々は、コムーネの資産をより有利に貸すことができて利益が増大しても、何の報いもうけない。実際、これらの資産は、売却されて、コムーネのすべてを手中にしている階級の悪政によってその代価を食いにされるか、貸し出されて、その利益がほとんどそのまま富裕階級のために支出されるかであるからだ。

そして、コムーネの土地の分割でさえ、下層階級の状況を改善することはできない。彼らの多くは割りあてられた土地を耕作するだけの資力をもたず、すぐにその意思に反して、土地は資本をもつ者の手に集まることになるからだ。こうして、結局はただコムーネが貧しくなり、貧者を疲弊させることで富者が肥え太っただけである。貧者たちがその固有の権利の代償として受け取ったわずかな代金は、彼らの状況を変えることには役立たないのだから。これは、形こそ異なるものの、前世紀にイギリスで大規模に起こったことと同様の現象なのだ。

これまでに述べてきたことを考えると、無知で、貧しく、抑圧された農民が、宗教という名を装った迷信にひたすらしがみつки、聖職者の見境のない手先となっていることは驚きであるかもしれない。シチリアの農民にとって、社会とは、強欲な地主や、取税吏や、徴兵係の役人や、憲兵の權威をとおしてしか現れない。神父は慈愛に満ちた言葉で彼のことを案じてくれる唯一の存在である。苦しいときには、助けはしないまでも彼を憐れみ、彼を人間として扱って、現在の不当さを埋め合わせるべき未来の裁きについて語ってくれる。農民の生活の理想的な部分はすべて信仰のなかにあり、彼がその外で知っているのは、労苦と努力と貧しさだけだ。彼が休みを味わえるのは、宗教上の祭日があるからなのだ。

近代社会は、聖職者の無知や悪徳、反愛国主義や蒙昧さを批判する。もしも近代社会が、政治や経済の冷徹な理論をそれに代えようとするだけで、自らの制度から抑圧や苦しみを産み出しながら、飢える者、苦しむ者にも世界のあるべき姿を知るには経済学者の著作を学べと勧めることしかできないなら、教会はいつまでも人々を支配し続けるだろう、見境のない、ばかげた、迷信深い信仰が、文明のあらゆる進歩に通じる科学的な信仰をうち負かすだろう。

ドイツにおける封建制廃止の際には、大半の諸邦で、土地の所有権は代々の耕作者に帰属することを法で定め、適当な法的措置と特別の融資制度によって、彼らが領主に対するあらゆる給付義務を免れるよう便宜をはかった。

フランスでは、前世紀末に同様の現象が生じたが、方法は異なり、領主に代わって農民が土地所有者となったのは、国家によるあらゆる封建的財産の没収を通じてであった。

イギリスやアイルランドでは、事態は別の形で進行した。領主は土地を支配し続け、その所有権には多くの制約があるとはいえ、持ち主には違いなかった。その結果、農民階級は悲惨きわまりない状況に陥り、アイルランドでは重大な国家危機の原因ともなった。1870年のアイルランド土地法は、イギリスが実施した従来とは逆の方針による最初の措置であり、耕作者に、彼が汗する土地に対する少なくとも一定の権利を公然と与えようとするものだ。

中世の伝統がより強く保たれたイタリアの諸地域、とくに1812年まで封建的秩序がそのまま繁栄していたシチリアでは、封建的権利の廃止は少しも社会変革を産み出さなかった。領地は、例年同様に永代小作に出された土地をのぞいて、元の領主の意のままになる所有地として残ったのだから。だから、封建的従属で成り立っていた土地と耕作者の結びつきは、他国のように所有という別の結びつきに替わるのではなく、ただその結びつきが壊れただけである。農民は、法のもとでは自由だが、義務もない代わりに権利ももたず、実際には貧困のために以前よりひどい隷属状態に陥った。

フランス革命が、その活気ある息吹をシチリアには感じさせなかったことが一般に嘆かれている。それはそのとおりであるが、それ以上に嘆かわしいのは、シチリアが、ヨーロッパ中で反動の精神が強まり始め、中世が息を吹き返すかのようにみえたそのときに、イギリスの影響下で改革を始めたことだ。シチリア人の胸が最初の自由の息吹を吸おうと広げられたそのとき、すでに周囲の状況は後退しており、最大の市民的改革は、完全なる反動の時代に、ブルボン家の手で導入された。こうして驚くべきことに、階級による階級の抑圧が保持されたのだ！ 1860年にも、そこには近代法とともに、中世の慣習や伝統が存在していたのだ！

この1860年の状態は、現在も続いている。シチリアは、単独で放っておかれれば、解決策を見つけるだろう。多くの特異な事実がそれを示しているし、シチリアの人々は知性と活力にあふれ、その人的資源は途方もなく豊かである。富裕階級の分別ある競争によってであれ、暴力革命の結果としてであれ、社会変革はきっと起こるだろう。だが、イタリアの他の地方に住む我々が、起こるはずのことすべてを妨げている。我々が、既存の抑圧を合法化し、抑圧者の無罪を保証しているのだ。

近代社会では、あらゆる合法的専制が、合法の枠外からの反抗を恐れている。さて、我々はシチリアで、しばしば真に自由な精神によるというよりも自由主義的な形式によってつくられた諸制度をもって、抑圧的な階級が保持しつづけた力を行使し、濫用する全権力を手中にし、彼らに対してすでにあった事実上の圧政に合法の形式を装う手段を提供した。そして今、我々は、抑圧がいかに激化しようとも非合法的な反抗は容赦しない、とうけあうことで、彼

らに手を貸している。だが、合法性それ自体が支配階級の手にある以上、合法的な反抗などあるはずがないのだ。

それでも、1860年には、国民的覚醒の熱狂のただなかで、シチリアの各地でも、その傷が非常に深く、とくに措置が必要である場所を知らしめるような事件がおこった。パーチェ、コレッサーノ、ブロンテをはじめとする多くの地域で流血の蜂起がおこり、農民の群れが「金持ち連中をやっつけろ！」と叫びながら地主や富裕階級に属する者たちを襲ったことは、根深い問題の表れとして熟慮するべき、きわだった社会的意味をもつことだった。こうした暴力的な動きを力ずくで抑えても、当時はそれでよかった。だが、秩序が戻った後も、悪にその芽のうちに対処しようとする措置はまったくとられなかった。教会財産の調査は、シチリア農民に利益となりうる唯一の施策であったが、財政上の目的で行われたにすぎず、島の農業のあり方を少しも変えはしなかった。その他の施策は、ただうわべだけのものである。

シチリアはたしかに病んでいる。1865年には、カーニカッティーニで争乱が起こった。今年(1876年)3月には、グランミケーレで農民の群れが貴紳たちの住む郊外に攻撃をしかけ、多くの者を負傷させ、死にいたらしめた。この争乱を誘発したのは、領主たちが消費税の負担を農民に請け負わせようと協定を結んだらしいとの噂であった。だが、ほんとうの原因は、二つの階級間の憎しみと相互不信である。そして、危険でもあるが、よりたしかな未来の予兆としては、すでに示したヴァッレドルモとヴィツラルバの事件で、対資本の闘いをよりよく組織するために、農民達が団結していることがある。

農民階級に教育が普及するほど、悪が激しくなるほど、対処の必要性は高まるだろう。農民は教育によって自らの状況をより明確に認識するし、しかも一人では、緩慢で不確実な手段によってしかそれを変えることができないのだから。

〔解説〕

上記は、シドニー・ソンニーノ (Giorgio Sidney Sonnino, 1847-1922) の「シチリア農民」(*I contadini in Sicilia*, 1877, Firenze) の一節である。「シチリア農民」は、ソンニーノが1876年にレオポルド・フランケッティとともにに行った社会調査をもとに発表した作品で、この調査の2年後には、彼はフィレンツェで『ラッセーニャ・セッティマナーレ』(*Rassegna Settimanale*)紙を創刊し、フランケッティ、バスクアーレ・ヴィツラリ、ジュステイーノ・フォルトゥナートらとともに南部の「社会問題」を精力的に紹介した。

ソンニーノはピサの貴族の家柄に生まれ、外交官として勤務したのち、1880年には上院議員に選ばれた。その後は国庫省大臣、外務大臣として数度の入閣を果たし、1906年および1909-1910年には2度にわたって首相を務めた。こうした後年の彼の政治的立場は、保守的自由主義、あるいは改良的保守主義などと呼ばれ、同時代のイタリアにおける自由主義諸勢力の中でも右派に属するとされている。

「右派」たるソンニーノは、1897年には『ヌオーヴァ・アントロジニア』誌に「憲法に帰ろ

う」(Torniamo allo Statuto)を発表し、イタリアもドイツにならって議会に対する王の権限を強化すべきだと主張した。また、第一次大戦の際には、外相として、首相サランドラや国王とともに、世論の大勢に逆らって参戦を決定した(1915年)。しかし、その一方では、民主主義者の普通選挙運動に理解を示したり、財務・国庫省大臣として、塩の値上げ、小麦関税の上昇と並行して累進課税の導入を提案する(1894年)など、開明自由主義的な姿勢を見せることもあった(R. Romanelli, *L'Italia liberale: storia d'Italia dall'Unità alla Repubblica*, Il Mulino, 1990)。

ソンニーノを含む「南部主義者」の「特徴」として、農民運動の激化や社会主義の浸透に対する危機感、それを予防するための「上から」の改革志向などが指摘される。しかし、ここに訳出した作品の発表とほぼ同時期(1876年)に議会の委員会が作成したシチリアに関するレポートは、封建制残存の理由を暗にシチリアの自然条件やシチリア人の気質に帰し、また、公有地分割をはじめとする統一政府の施策の成果を高く評価して、「社会問題」の存在を否定するものであった。(C. Petraccone, *Le due civiltà: Settentrionali e meridionali nella storia d'Italia*, Laterza, 2000, p.108; G.A.Haywood, *Failure of a Dream: Sidney Sonnino and the Rise and Fall of Liberal Italy*, Olschki, 1999, pp.108-109.)。こうしたことを考慮すれば、ここに見られるシチリアの地主や統一政府に対するきびしい批判は、詳細な調査にもとづくもっとも初期の南部問題の告発として、その意義を充分に理解される必要があるだろう。

翻訳のテキストには R. Villari, *Il sud nella storia d'Italia*, Laterza, 1987, pp.113-123 を用いた。

(かつた ゆみ 本学助教授)